

いとうこざえもん
五世 伊藤小左衛門

世界に通用する生糸に改良
— 四日市の近代製茶業・製糸業の祖 —



伊藤小左衛門 (1819 ~ 1879)
肖像画：四郷郷土資料館蔵

実業家の五世伊藤小左衛門は、将来の国益を考え外国との貿易の有益を説き幕末から明治初期にかけて四日市の近代産業を推進した。

伊藤家は忍藩（現在埼玉県行田市）飛地の太矢知陣屋に代々仕えていた。祖父の三世伊藤小左衛門は、三重郡室山村（現・四日市市四郷地区）で副業として味噌の醸造業を営んでいた。小左衛門は富豪の伊藤家の長男として生まれた。

■茶と生糸が貿易に有利との先見性

1854（安政元）年、安政の大地震後、兄弟4人で崩れた味噌蔵を再建し、醸造業で大きな収入を得ることができた。小左衛門は書物を読み、生糸と茶が貿易有望品であることを知り、茶畑を設けて時運を待った。

1858年、小左衛門は酒業を創業し、多角経営を目指した。1859年、小左衛門は開港時の横浜に直ちに行き、茶の販路や外国人の嗜好を調べた。また宇治にも行き、そこで茶の製法を学び、製茶生産を確立して、茶の輸出で巨額の富を得ることになった。三重県の茶の輸出高は全国トップの座をしめた。また、小左衛門は製糸業にも乗り出した。日本の生糸

は外国製に比べて粗悪であったので、小左衛門は器械製糸の必要性を感じていた。1874（明治7）年、器械製糸所を開業した。当地に春蚕飼育を起こし、甥の小十郎を上州と信州の養蚕地に派遣し、育蚕法を学ばせた。1876年、自ら富岡製糸の技術指導を受け、姪ふたりを富岡に派遣して繰糸技術の習得をさせるなど、生糸の品質向上に努めた。

■最上級の生糸を生産

1877（明治10）年、本格的な器械製糸に向けて努力し、伊藤製糸の生糸は富岡製糸に劣らない品質の生糸との評価を得るまでになった。この年、上野で開催された内国勸業博覧会に出品し、褒賞を授与された。翌年の1878年パリ万国博覧会にも伊藤製糸の生糸は出品され、銅賞となり、その品質は認められることになった。1882年、伊藤製糸繰糸場に県下で初めて蒸気汽缶（ポイラ）を導入し、近代工業として製糸工場となった。明治20年代には、伊藤製糸場は職工100人以上を雇用する県下最大の製糸場となった。1900年のパリ万国博覧会では金賞を受賞し、世界に通用する品質の生糸との評価を得た。

品質の生糸との評価を得た。

伊藤製糸場は1900年の火災で焼失したが、富岡製糸工場の影響を受けて1903年に繰糸場を含む第二工場は、落成した。

1938（昭和13）年に室山製糸株式会社に改組、1941年に亀山製糸株式会社室山工場となった。

（大橋公雄）



伊藤製糸第一繰糸工場

錦絵：四郷郷土資料館蔵